

第19回展

世界の原始布

Bast Fibers of the World

2019年11月28日 — 2020年3月14日

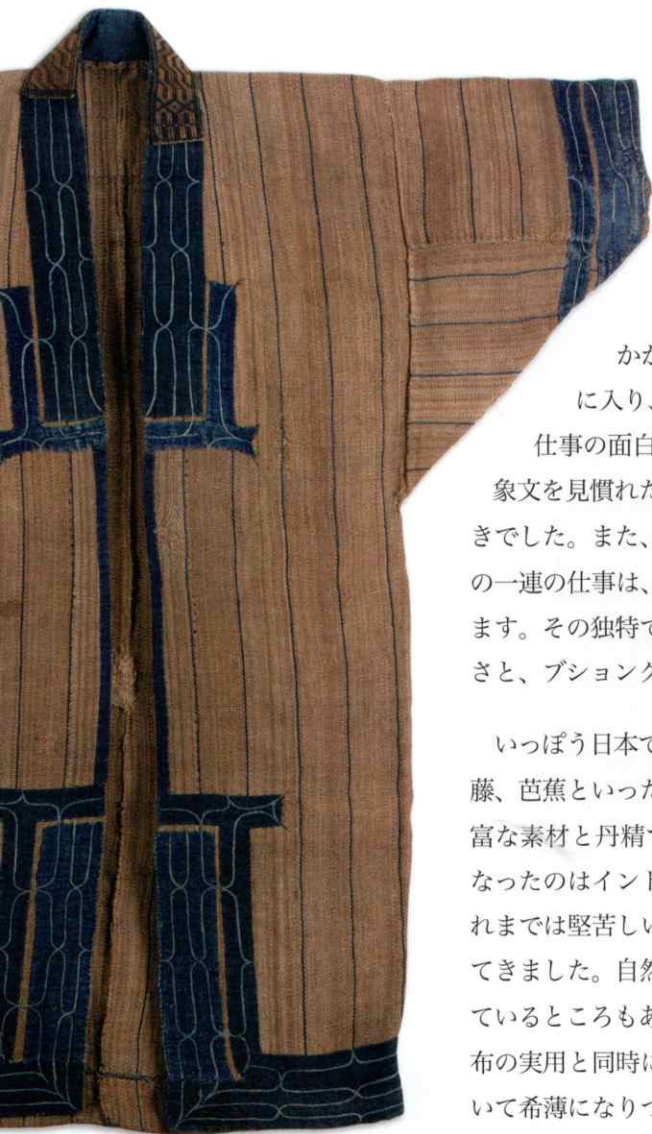
木・金・土曜日 10時—17時開館（年末は12月21日まで、年始は1月9日から）

岩立
フォークテキスタイル
ミュージアム

世界の原始布

今回は「原始布」というテーマで、アフリカ・日本をはじめ、世界各地の草木から採集した繊維の布を展示します。表紙に使われているクレーの絵の様な文様の布は、中央アフリカに位置するコンゴ民主共和国のクバ王国、ブショング族のもので、ンチャックと呼ばれ女性の巻衣装、死装束にも使われる大事な布で、一生かかっても数枚しか作ることができないそうです。1980年代に入り、集め始めたアフリカの染織品は、どれもダイナミックな手仕事の面白さがあり、幾何文が圧倒的で、インドの草花を主とする具象文を見慣れた目には、まるでジャズの世界に引き込まれた様な新鮮な驚きでした。また、ラフィア椰子の繊維から作られるこの布を完成させるまでの一連の仕事は、村の子どもから大人までたくさんの人々が関わって作られます。その独特で普遍的な文様を支えているのはラフィアの素材としての強さと、ブショングの人々が送る日々の営みの逞しさではないでしょうか。

いっぽう日本でも、かつて木綿が普及する以前、大麻をはじめ苧麻や葛、楮、藤、芭蕉といった各地の風土に活かされた繊維が使われていました。この豊富な素材と丹精で美しい手仕事を再認識し、自国の染織品を集めるようになったのはインドや他国の収集が終わってからでした。収集を始めると、それまでは堅苦しいと思っていた「こぎん」の文様も、味わいや面白さが見えてきました。自然布と呼ばれるこれらの布の数々はすでに過去のものとなっているところもありますが、今日でも技術が受け継がれている様子を見ると、布の実用と同時になにか精神的な必然性があるような気がします。現代において希薄になりつつある自然と人間の豊かな関係を、原始布を見つめることで、いま一度考え直すきっかけになればと思います。



▲ 上衣 [アットゥシ]
オヒョウ 木綿 / 北海道 アイヌ

Bast Fibers of the World

This exhibition focuses on bast-fiber textiles, introducing fabrics that are made of plant fibers collected from all over the world, mainly from Africa and Japan. The cloth shown on the front page of the catalog looks like a Paul Klee painting but was woven by Bushoong tribe people from Kuba Kingdom, located in the Democratic Republic of Congo. This appliquéd skirt, called N'tchak, is an important cloth used as womens' costume and also as a shroud. It is made of raffia palm fibers.

In Japan, local bast-fibers such as taima (hemp), choma (ramie), shina (linden), fuji (wisteria), bashô (banana fiber) and kudzu (Japanese arrowroot) had been widely used before cotton became common to everyday clothing. We can feel the strength of bast-fiber textiles, emanating from the beauty of materials and the patterns produced by those materials. We hope that this exhibition will be the opportunity to rethink the profound relationship between human beings and nature, a relationship that has become more and more tenuous in our contemporary world.



◀ 角袋 / 大麻 柿渋染 / 日本